

伊賀郡處に、猿田彥神女吾娥津媛命云々、此神之依、知守國謂吾娥之郡云々、後改伊賀吾娥之音轉也とあり、○註是に依に伊賀は阿賀アガと通へり、さて於能禮オノレとは自己を云稱なるに、又人を賤しめて云にも用ひり、○中略然意禮オレとは人を賤しめて云稱なるを、今世には自己のことを然云、此らの例を以見れば、阿賀アガと云も、自己のことなるを、又人を賤しめて云にも用ひしにや、是又今世にも然り、

〔日本書紀皇極二十四〕二年十一月、蘇我大臣蝦蟇聞山背大兄王等、摠被亡於入鹿、而嗔罵曰、噫、入鹿極甚愚癡、專行暴惡、你之身命不亦殆乎、

〔倭訓栞前編二〕あれ○中略其人に對してあれとよぶ事、盛衰記に見えたり、今われといふに同じ、

〔古今著聞集變十七〕大納言の夢に見給ふやう、年たけしらがしろき大童子の、とくさのかり衣きたる一人、西向のつぼの柑子のもとにかしこまりて居たり、大納言あれは何ものぞととひければ、○下略

〔倭訓栞前編四十二〕われ○中略他を指て我とも己ともいふは、他に代りていふ詞也、よて俗に卑

き人に對しいふ辭となれり、

〔古今著聞集武九〕白河院○中略仰事ありけるは、小一條院は世のをこの人にて有けるが、賴義を身をはなたでもたりけるが、きはめてうるせくおぼゆる也、今はわれが侍ればとこそ、忠盛朝臣には仰事有けれ、

〔空穂物語國讓上〕宮の君などをのれは、みそかをとこし、人とふみかよはしやはする、

〔竹取物語〕とぶ車ひとつぐしたり、らかいさしたり、その中にわうとおぼしき人○中略いはく、○中略かくや姫につみをつくり給へりければ、かくいやしきをのがもとにし、おはしつる也、○下略

〔古事記上〕故其所寢大神聞驚而○中略故爾追至黃泉比良坂、遙望呼謂大穴牟遲神曰、○中略意禮○二字以音